

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第六十八回）

ひ えん か

「罷宴歌」

～山上億良～

ちくぜんこくしゆ

やまのうへのおくら

万葉集卷三には筑前国守（地方長官）・山上億良の宴会の途中あるいはお開き時の退出する折に詠んだとされる次のユーモラスな歌が載せられている。

・この歌の題詞は「山上憶良臣、宴を罷る歌一

おみ

うたげ

まか

まか

首」であり「罷る」は貴人（高貴な人―ここでは大伴旅人）のもとから礼をつくして退出する意といわれる。

いま

まか

こな

憶良らは 今は罷らむ 子位

わ

くらむ それその母も 我を

待つらむぞ

卷三 — 337

(解説)

私ども憶良のようなものはもうこれで失礼します。家では子供が泣いていましょう。多分その子の母も私の帰りをまっけていましょうよ。という意。

(1) 伊藤博著「萬葉集釋注」によると、この歌は前後の歌の関係から考えると天平元年(729)に詠まれたと仮定して、時に憶良は七十一歳。家で泣きじやくる子がいるべくもない。ましてさような子をあやして待つような妻もいるはずがない。

(2) 七十一歳の憶良がそのような子と妻がいるごとくにうたっているところに笑いがある。どんなに引きとめられる宴席でも、母ちゃん“が待っていると底なしにのろけて

しまえば、笑って放任されるのが常であろう。憶良も、その手をここに用いているとある。

(3) この歌が詠まれたときは憶良が宴会途中で退出した時の歌か、或いはお開き時の歌かの二説がある。

①一つの説としては「今は」と云ったのは、もうお先へといい宴会の途中の退出である。

・あまりお酒が得意でなかったといわれている憶良が、ユーモア心でもってこんな歌を残し、宴会を途中退出する姿がほほえましく目に浮かぶ。

②さらに、もう一つの説として『今は罷らむ』は憶良が「楽しい宴のお開きを告げる客側の代表者としての挨拶として述べた表現」であろうとの意があるとの両説がある。

(4) この宴会は大宰帥（大宰府長官） 大伴旅人が主催し、旅人の官舎と思われる会場で憶良

以下が参加し催されたものと推測されている。

(参考文献)・新潮日本古典集成、伊藤博著「萬葉集釈注」、澤瀉久孝著「萬葉集

注釈」等

(写生地)この宴が開かれた場所と思われる大宰府政庁跡北西背後の大宰帥大伴旅人邸址に推定される坂本八幡宮(福岡県太宰府市坂本)一帯を描く。(杏花)

